

中国60年代と世界

第2期第7号(通巻第14号) 2018.2.22

発行人 〈中国60年代と世界〉研究会(幹事・土屋昌明)

編集人 文革50周年再検討会編集グループ

〒214-8580川崎市多摩区東三田2-1-1-9603 tuwuchangming@yahoo.co.jp

例会予稿: 2017年度の研究成果と今後の展望…土屋昌明(1) / 史料復刻: カボ、バルク同志との談話 1967年2月3日…毛沢東(3) / 史料復刻: 三月の農村の一日 ある農民の口述記録 現在の農村の分析その一…向承鑑(6) / 胡傑監督『林昭の魂を探して』字幕(その6)…土屋昌明編訳(11)

研究会(2018年2月22日)発表予稿

2017年度の研究成果と今後の展望

土屋昌明

2017年度は、1957年におこった反右派運動から60周年というふしめで、いくつかの視点を軸にして、この運動をかんがえなおしてみた。まず以下に、例会および特別研究会のテーマと主たる話者をあげておく(共催者・コメンテーター・概要などは各回の報告をご覧ください)。

4月27日 反右派運動の研究史と現在の問題(土屋昌明)

6月24日 反右運動の歴史的淵源とその深遠な影響(申淵)

6月29日 向承鑑に対するインタビューについて映像を交えて紹介(江雪)

8月31日 『白雲における一打三反』を見る(鳥本まさき)

9月30日 強制収容の記憶とテキストと視覚化—張先痴の著述をうけて(張先痴)

10月26日 文革研究の対象と方法 論点整理と見取り図構想の試み(福岡愛子)

12月16日 反右派運動と地下出版物事件「星火」の重要性(傅国涌)

軸としたのは、まずは前年からひきつづき、胡傑監督『林昭の魂を探して』『星火』でとりあげられた問題に対する考察である。この問題について、江雪と傅国涌の報告はあらたな視野をひらいてくれた。

もうひとつは、方法として、実体験者からのオーラル・ヒストリーを重視する研究だったことだ。こ

の方法も、胡傑監督の映画作法から着眼した。上記では、申淵と張先痴がそれにあたる。本人の警咳に接し、表情や身体を目にすることで、歴史に対するある種のリアリティを感じるとともに、問題への接近の意欲をかきたてられた。この点を重視した理由は、反右派運動から60年が経過して、実体験を語ることのできる人が残りすくなくなっているからである。反右派運動に関する第1次資料を検討することができない状況であることも、理由のひとつである。

さらに、ドキュメンタリー映像によってインタビューを参照したこと。6月24日には翰光監督により、李銳、王書瑤、張先痴ら右派経験者たちに対するインタビュー集が上映された(日本語字幕、初公開)。6月29日には向承鑑に対する江雪のインタビュー、8月31日には賈之坦監督『白雲における一打三反』に鳥本まさきが日本語字幕をつけて上映、9月30日には翰光監督による、張先痴へのインタビューをまとめた作品が上映された(日本語字幕、初公開)。この回では、胡傑監督『グラグの書』(石岡亜希子訳)と邱炯炯監督『痴』も日本語字幕で上映。12月16日には胡傑監督『星火』を上映した。これらでおこなわれているインタビューは、文献資料をおきながら内容をおおいに参考になる。と同時に、本人に直面したのには及ばぬものの、視覚と聴覚をとおして、問題への接近の意欲をかきたてられる。

歴史的な問題としては、反右派と文化大革命のあいだには、どのような連続性があるのか、という点

である。12月16日の傅国涌に対する翰光のコメントで、翰光が香港中文大学で独自に調査した資料が映像で示された。それによると、反右派運動から文革への流れについて、毛沢東は計画的に推進したことがうかがえるという。その資料は、毛沢東が1967年にアルバニア労働党中央政治局員カボらおよび軍事代表団に対して語った2度の談話の内容である。内部発行の『建国以来毛沢東文稿』（中央文献出版社、1998年）第12冊220頁では、「まえにわれわれは農村の闘争、工場の闘争、文化界の闘争をやり、社会主義教育運動を進めたが、問題を解決することができなかった。なぜなら、公開的に、全面的に、下から上へ広い範囲の群衆を発動してわれわれの暗黒面をあばくような、ある形式、ある方式をみだせていなかったからだ」（土屋訳）とあるだけだが、『毛沢東思想万歳』（丁本、1969年8月編）には詳細に記述されており、翰光はその談話の手写本をとりあげて重要性を指摘したのだと思われる（カボらに対する談話の日本語訳をうしろに掲載する）。

これをみると、申淵が提示した視点が参考になる。いわく、「（反右運動は）建国後、何度となくおこった政治運動の続きであり、その重要な事件の一つであるとともに、いろいろなかたちで歴史に再現した。反右傾、四清、文革、そして89年六四事件は、いずれも反右運動の延長ないし発展にほかならない。反右運動の最も直接的な結果とは、大躍進と餓死者3000万人余をだした大飢饉、そして十年文革であった。つまり、文革の発動をいわゆる反右派運動の延長上において考えるという視点である。

申淵の視点は政治的なメカニズムに重心をおいているが、これと対をなすのは、思想的な視点である。反右派運動がかりに、「右派に反対する運動」であるとともに、「右派の運動に反対する」ことでもあるとすれば、「右派の運動」が存在したことになる。右派の運動とは、民主と平等をめざした者たちの運動であり、反右派運動をとおして中国共産党に対立するものとなった。北京の『広場』に関わる人々、林昭、『星火』メンバーの活動がそれにあたる。思想史では、そちらから文革への連続性を考えることになる。66年後半から始まった造反、出身論への反対などはそのライン上にあり、さらに楊曦光らへ

とつづく。錢理群は次のように述べている。「度重なる政治運動、また文化大革命の自身の教訓を通じて、毛沢東に対する幻想を破棄するだけでなく、完全に毛沢東の思想的影響とコントロールから抜け出し、自覚的に毛沢東と彼が代表するイデオロギー、体制と徹底的に決裂し、反対党を作り、毛沢東政権と直接対抗する道である。これは、「毛沢東主義者」や陸文秀など、体制内での懐疑、批判、反抗とは別のオルタナティブな選択で、ある程度『星火』を継承したものとも言える。毛沢東主義者・楊曦光が逮捕入獄して以降、知り合った「中国労働党」の劉鳳祥、張九龍、雷特超、侯湘風などは、そのような「徹底決裂派」である。彼らの中の中核の多くは一九五七年の右派である」（『毛沢東と中国』、阿部幹雄ほか訳、青土社、下巻143頁）。

さて、このように考えると、1979年および1989年の政治運動も以上のふたつの視点からとらえることができるのではないかとと思われる。これにより、従来あまりみえていなかったことがみえてくる。たとえば、79年と89年の運動も、右派の運動から文革での造反の流れの上においてみるることができる。79年と89年にも反右派運動と同様な（それ以上の）打撃が鄧小平によっておこなわれたが、それをもっと認識すべきであること（ちなみに、廖亦武『低層放談録』には80年代初に打撃を受けた人々の話がある）。それぞれの相違も考慮に入れること。たとえば、錢理群はこう述べている。「八〇年代末の「学生運動」は、一九五七年と一九八〇年の学生の学園内での思想運動とは異なり、初めから学校を出て街頭に繰り出す政治運動となった」（一九八六年一二月の学生運動は）一九七八年から八〇年の社会民主運動の延長とも見なすことができ、鄧小平が一九八一年に徹底的に弾圧した後、民間の抵抗運動が再度湧き起こったのである」（同前、285頁）。

興味深いことに、1957年に右派とされた人々は、80年代には社会復帰していたから、80年代の政治運動を観察することができた。張先痴は、1989年には成都でデモに参加したことを研究会で語った。『星火』の顧雁は、方励之に招かれて中国科学技術大学教授に就任し、そのあと学内で六四事件に遭遇した

〔(10) ページにつづく〕

史料復刻

カポ、バルク同志との談話 1967年2月3日

毛沢東（解題：前田年昭）

* 転載にあたっては訳注は省略した。また、明らかな誤植は正し、表記の整理を行った。

シェフ同志〔アルバニア人民共和国首相〕はいつ頃中国に来られたのですか。（答——去年五月です）当時、私は、結局、マルクス・レーニン主義が勝利するのか、それとも修正主義が勝利するのか、これは、二つの路線の闘争の問題だと話したのでした。私は、さらに次のようにも話したのでした。結局、どちら側が勝利するかは、いまのところまだ見きわめられないし、まだ結論を出すことはできません。二つの可能性があります。修正主義がわれわれを打ち倒す可能性もあり、われわれが修正主義に打ち勝つ可能性もあります、と。私は、なぜ失敗を第一の可能性に据えたのでしょうか。このようにするのが、問題を見るのに有利なのであり、敵を軽視しなくなるからです。多年にわたってわが党内の闘争は公然化していませんでした。一九六二年の七千人大会の時、私はある話をしました。修正主義がわれわれをくつがえそうとしている。もし、われわれが闘わないならば、少なくとも数年、多くて十数年から数十年うちに、中国は変色するかもしれないと話しました。この話は発表されていません。しかし、当時すでにいくつかの問題が見つかっていました。六二年から六五年の間に、なぜ、われわれは多くの仕事をうまくやりとげられなかったのか。これは遠慮して言っているのではなくて、本当のことをいっているのです。われわれは、かつてはただ個々の問題、個々の人物しかとらえていなかったのです。五三年冬から五四年にかけては、高崗・饒漱石をたたき、五九年には彭徳懐、黄克誠をやっつけました。この他に、なお、文化界および農村、工場でのいくつかの闘争をやりました。すなわち社会主義教育運動です。あなたがたもご存じのことと思いますが、いずれの場合にも、問題を解決しておらず、公然と全面的に、われわれの暗黒面を下から上へあばきだしていく一つの形式、一つの方式が見出だされておられません。だから、今回の文化大革命をやる必要があったので

す。文化大革命についても、いくらかの準備を行いました。一九六五年一月に、呉晗に対する批判論文を発表しましたが、北京では書くことができず、上海に行って姚文元を見つけるほかなかったのです。この芝居は最初は江青らが仕組んだものです。もちろん、事前にやはり私は教えられていました。論文がかき上げられてから、私は渡されて読みました。彼女〔江青〕は、私にだけは見せるが、周恩来と康生には見せてはならない、そうしないと劉少奇や鄧小平たちも読もうとするといいました。劉少奇、鄧小平、彭真、陸定一はこの論文に反対したのです。この論文が発表されると全国で〔新聞雑誌に〕転載されましたが、北京だけは転載しませんでした。（湖南省でもまだ転載されていません、張平化〔湖南省委第一書記〕が検閲したからです、と誰かが口をはさんだ。）当時、私は上海にいました。私はこの論文をパンフレットにし、各省で発行するように言いました。ただ北京でだけは印刷・発行されませんでした。彭真が出版社に通知を出し、印刷・発行をしてはならないと命じたからです。北京市委員会は、水のもれるすきまもなく、針も通らない状態になりました。いまは改組されていないでしょうか。いやまだだめです。もっと改組されなくてはなりません。市委員会を改組することを発表したい、われわれは××個の防衛師団を増やしましたが、現在でも××個の防衛師団があります。以前は×師団がすぐれていたのですが、あまりにもぼろぼろになりすぎていました。今は紅衛兵がわれわれを手伝ってくれますが、しかしたよりにならない紅衛兵もおります。黒眼鏡をかけ、マスクをかけ、手には棍棒や刀を持って、いたる所で乱暴をはたらき、人を殴打したり殺したりしているものもおり、本当に人が殺されたり、傷ついたりしています。これらの人びとのうち多数が高級幹部の子弟です。たとえば賀竜や陸定一の娘たちがそれです。だから、軍隊にも問題がなかった

わけではありません。六五年一二月に羅瑞卿〔問題〕を解決し、六六年六月一日に最初のマルクス・レーニン主義の大字報〔内容〕が放送され、八月に紅衛兵が現れて群衆をたち上がらせました。昨年、聶元梓が一枚の大字報を書きました。当時、私は杭州にいて、ある日、この大字報を読みました。読むとすぐ、私は康生と陳伯達に電話をかけ、この大字報を放送する必要があると言いました。こうしてこの大字報は全国四方八方に広がったのです。清華大学と北京大学の両附属中学〔の紅衛兵が私に送ってくれた〕二通の手紙を私は読みました。そして八月一日にこの両校の紅衛兵に手紙を書き送りました。その後、紅衛兵が大いにやりはじめました。八月一八日に、私は数十万人の紅衛兵を接見しました。続いて〔実際には、その前〕八期一中全会を開き、私は二百字あまりの大字報を書きました。当時、中央から地方にいたるまで、一部の責任者が学生運動に反対し、プロレタリア独裁に反対し、白色テロをおこしました。このようにして、やっと、劉少奇、鄧小平の問題があばき出されました。現在、双方が決戦中であり、まだ解決を見るに至っておりません。今年の三・四月頃には目鼻がつくかもしれませんが、問題の解決は、来年の三・四月頃になるかもしれず、あるいは、もう少し時間がかかるかも知れません。何年も前に、私が数百万人の人びとを洗いきよめようとしたのですが、それは無駄でした。彼らは、そんなことは聞きいれなかったのです。どうしようもありませんでした。『人民日報』では二回にわたって奪権が行われました。これは私のいうことを聞かなかったからです。私は、昨年、私は『人民日報』はもう見ないと声明しました。何回言っても、彼らは聞きいれなかったのです。見たところ私のこうしたやり方は、中国では効き目がないうでした。それは、大学や中学が長期にわたって劉・鄧・陸の掌中ににぎられており、われわれがそのなかに入って行けず、どうにも手の施しようがなかったからでした。

わが党内であばき出された問題〔と関連した人びと〕は、次のいくつかの部分に分けることができます。

第一の部分は民主主義革命をやった人びとです。

民主主義革命の時期には協力することができ、帝国主義、封建主義を倒すことには賛成し、官僚資本主

義を倒すことにも賛成しましたが、民族ブルジョアジーを倒すことには賛成でなくなりました。土地を農民に分け与えることには、賛成したのですが、合作化には賛成しませんでした。この部分の人びとのうちには、いわゆる古参幹部も含まれています。

第二の部分は、解放後、党に入ってきた人びとです。〔党員の〕八〇％は解放後に入党したのですが、そのうちの一部分は幹部になっており、支部の書記や県委員会の書記になっているものもおります。

第三の部分は、国民党からひきとったものです。これらの人びとのうちにはかつて、共産党員であったが、後に党を裏切り、新聞に反共声明を出したことがあるものもおります。その時はわからなかったのですが、いまは、調べてわかっています。彼らは共産党を擁護せず、共産党に反対しているのです。

第四の部分は、地主、富農、反革命分子、悪質分子、右派分子、ブルジョアの子弟です。解放後、彼らは大学にはいり、一部の権力を掌握しました。全部が悪質な者というわけではなく、なかには、われわれの側に立っているものもおります。しかし、一部にもものは反共的です。要するに、中国では悪質な者は多くはなく、多分数％にすぎないでしょう。たとえば、地主・富農・反革命分子・悪質分子はせいぜい五％で、約三千五百万人です。彼らがばらばらで、各農村や、各都市や、各居住区に分散しています。もし彼らが一緒に集まり、武器を手を持てば、それは一団の大きな敵になります。彼らは、滅ぼされた階級であり、その代表的人物は、三千五百万人のうち、せいぜい数十万人にすぎないし、分散しています。だから、大字報、大衆運動、紅衛兵がいったん出現すると、彼らはひどくおたまげるのです。

大学生のうちの相当な部分に、私は疑いを抱いています。特に文科系の人間に疑いを抱いています。文化大革命が行われなければ、彼らは修正主義分子に変質し、修正主義を実行します。文科系の学生は文章が書けず、哲学科の学生は社会現象を説明できず、さらに経済学を学ぶ学生がまたなんと多いことでしょう。〔しかし、〕今は見たところ希望がもてるようです。非常に激しく闘っています。

大衆がみなたちあがれば、どんな悪質なものも全部、なげすめることができます。プロレタリア

独裁をうち固める点では、私たちは楽観的です。昨年、シェフ同志と話をしたときから、私は、いくらか楽観的になっています。(カポ同志がいった——毛主席をかしらとする革命の路線は偉大な勝利を収めました。)

いまはまだ、かなりの勝利を収めたとは言えません。来年の今頃になれば、そんなふうにいえるでしょう。でもわれわれが敵にうち敗れるかもしれません。うち敗れたら敗れたときのことです。いずれにしろ、革命をやる人間はいるものです。中国は平和を愛するという人がいますが、それはホラで、実際は、中国は闘うことを好むのです。私もその一人です。闘うことを好めば、修正主義が出現するのは、そんなに容易ではないでしょう。

(カポ同志がいった——闘争しないわけにはいきません。そうしなければ、どうして革命が実現するでしょうか?)

その通りです。中国で修正主義をやるのはソ連でやるほど容易ではありません。中国は半封建的・半植民地的な国として、百年以上も圧迫を蒙ってきました。われわれの国家は軍隊が打ちたたてたものです。学校はもとのままで変わっていません。党と政府の指導者は、任命され、派遣されたものです。曹荻秋〔上海市市長〕や陳丕顯〔中共中央華東局書記〕のような人びとは任命されたものではないでしょうか。その後選挙されるようになりましたが、私は選挙を信じません。中国には二千以上もの県があり、一つの県で二人を選挙すれば四千人以上になり、四人選挙すれば一万人以上になります。どこにそんな大会を開く広い場所がありましょう。そんなに多くの人とどうやって顔見知りになるのでしょうか。私は北京から選ばれたものですが、たくさんの方が、私を見たことがありません。全く見たこともないのに、どうして選ぶのでしょうか。ただ、名前が知られているからということにすぎません。私と総理はともに名前が売れているわけです。しかし、やはり紅衛兵には及びません。彼らの指導者は、やはり紅衛兵と話しているのです。〔しかし〕紅衛兵も絶えず分裂しており、夏には革命的であったのが、冬には反革命になってしまいます。夏には少数派でも、冬には少数派から多数派になります。「井崗山」〔北京師

範大学の紅衛兵組織の名称〕や、聶元梓は圧迫されて、大変革命的でしたが、去年の一二月から今年の一月にかけて分裂しました。しかし、その経過がどうであれ、結局は良い人間が多いのです。現在、無政府主義が流行し、すべてを疑え、すべてを打倒せよ、と叫ばれるようになりました。その結果は自らの頭上にふりかかってきて、だめです。しかし、闘争をくりかえすうちに、誤りをおかしたものは、どうしても、足場がくずれて、倒れていくことになるのです。街には、×××、×××を打倒せよという大字報がはられています。×××、×××を打倒せよという大字報がいつそ多くなりました。×××は×××で、いくつかの部をうまくコントロールしているが、××部は彼を打ち倒そうとしています。××を打倒せよというのは××軍区司令部の提起したのですが、それが出ると、数日のうちに、自分が打ち倒されてしまいました。ただ、一つの永遠の真理があります。それは圧倒的多数の党员・団員および人民はまともだということです。

〔東京大学近代中国史研究会訳『毛沢東思想万歳(下)』三一書房、1975年3月。pp.372-377〕

【解題】邦訳は、ここに紹介した東京大学中国近代史研究会(世話人・衛藤藩吉)訳と、竹内良雄訳、竹内実編訳『毛沢東 文化大革命を語る』(現代評論社、1974年12月)があり、ともに底本は『毛沢東思想万歳』丁本である。ここで毛沢東は、文化大革命の歴史的意義を、農村における社会主義教育運動の都市への拡大、連続として、明確に語っている。

『星火』の闘いに心を打たれるものは少なくないはずだ。しかし、これを思想史として検討する場合、毛沢東思想に反対し、マルクス・レーニン主義に反対した運動と断ずるのはあまりに近視眼に過ぎる。有力な支持協力者であった杜映華がなげ子息に『スターリン全集』を残したのか、星火グループ内でハンガリー事件やユーゴスラビアのめざした方向がどう見られていたのか等々、いずれにしても、共産主義運動内部の路線闘争として国際的な分析が必要になる。すなわち、大躍進から文化大革命に至る歴史を人民公社をめざす連続革命として擱むためには、中ソ論争への理解が必要不可欠である。人民は革命(造反)を求めるという階級的立場からの視座が求められるゆえんである。(本誌編集 前田年昭)

史料復刻

三月の農村の一日 ある農民の口述記録 現在の農村の分析その一

向承鑑 (訳&解説・土屋昌明)

同志よ、きみは現在の農村の状況を聞きたいのか？
私は、あれら党グループや幹部グループの関係とか、生産積極性や生産力とか、生産関係とかについては話せない。生産力とは何なのか、ということすら、私にはよくわからない。しかし、同志よ、もしいやでなければ、私の一日のことを話してあげよう。有用であれば、覚えておけばよいし、無用であれば、ただのおしゃべりということだ。

何度も続けて、誰かが私の腕をゆするので目が覚めた。母親が「早く起きなさい、出勤のサイレンがとくに鳴ったわよ」と言った。力をこめて体を動かそうとしたが、まるでくたくたの麻縄でベッドにぐるぐる巻きにされているかのようなようだった。がんばって目をあけようとしたが、まぶたは何十キロの錘より重かった。はーと息が抜けると、また眠ってしまった。しかし母親は、また私を揺り起こして言った、「まだ寝ているとたいへんよ。昨晚の弁論会があんたのところに来るわよ」。母親が弁論会のことを持ち出すと、眠気はほとんど吹っ飛んだ。鋼鉄大生産から今日に至るまで、村の半分くらいの人はみんなそれを味わったことがある。昨晚の弁論会では、王さんの次男がこぶしでぶん殴られ、足で蹴られて、何度も地面に倒れては引き立たされ、最後は引き立たされても立てなくなった。原因は、出勤時間に遅刻したからだった。母親は続いて言った、「私がこの世に生きているうちに、あんたがあんな刑罰を受けるのを見せないでおくれ。不利なことは避けて通るものよ。あれら実権を握る畜生どもには逆らえないんだから」。

私は起き上がり、土地改革のときに作ったぼろい上着を着た。母親は寒そうだからと、父の残した長めの上着を背中からはおってくれた。父は先月、餓死したのだ。食堂はしまっしまい、自留地から収穫した150斤(75キロ)の穀物も、地下から探し出されてしまった(しかも、おまえの家は公のものだ、

と言われた)。裏庭のニレの樹の皮はとうに剥かれて、裏の奥のも誰かに剥かれてしまった。管理区の周囲だけが手つかずに残っていたので、うちの弟がこっそり剥きに行ったが、オノとナイフをとられたうえに、樹木を破損したと言われ、何日も縄でぐるぐる巻きにされて、「むち打ち」(弁論会のこと)に遭った。しかし、門前のドブあたりの柳は芽を吹いたばかりで、葉っぱも長くなっていないが、食べられなかったら餓死だ。こうして餓死した人の多いこと！うちと親戚だけでも、父と生まれたばかりの娘、それにじいさん・ばあさん、おじとおばが餓死した。全村で340人あまりもいる。この数日、毛主席が突然気を回して供給がおこなわれたので、うちの母と妻もあの世に行かずにすんだ。もしそれすら無ければ、私だけが、生き残ってよかったという話になっていた。最近、行政も餓死者の数につき統計を出しているが、それによれば、たった63人だ。まったく奇妙なことだ。いつもは数字を大きくするのが好きなくせに、今回ははじめて自分たちの功績を小さくみせて、半分以下にしているのだから。

目をこすりながら、ベルトをしめた。ミノをかついで外に出た。外に出るや、ふるっと身震いがした。寒い！空を仰ぐと三つ星が沈もうとしており、明けの明星が高いところに来ている。ちょっと数えてみると、夕べはだいたい2時間寝た。大躍進とそれ以後の日々にくらべたら、最長に寝たうちには入らないが、けっこう寝た方だろう。ああ、だがいまや大躍進の一日は20年に等しいのだから、おそらく一晩に2時間寝るとは話にならないくらい長く寝ることになるだろう。そのとき、村の東側からシュー、シューというホイッスルの音と、しわがれた怒声が聞こえてきた。「王の次男坊！おまえ死にたいのか。昨日、一番初めに出勤することに決めたのに、それでも起きないのか！」空は暗かったが、趙隊長の声だとわかった。「泣いたって、仮病使ったって、死

んだふりしたってだめだぞ。今日こそは恥をかかせてやる！」趙隊長は業務に責任があるから、毎日、日が昇らないうちからひとりて鍬を担いでいる。いつも気合いが入っており、恐ろしい剣幕だ。公社の党支部委員であり、生産隊の財政委員（つまり会計）である。公社員の食べるものは調達できないくせに、自分のまかないはちゃんと計画済みだ。自分だけでなく、家族にも飢えている者がいないところか、みんな太っている。自分の仕事はいつでもよいが、公社員の仕事はきめ細かく段取りしてある。その段取りにしたがって、24時間1秒も無駄のないように、暗いうちからみんなをけしたてて農地に行かせる。毎日毎日ずっとこうだ。

出勤時間に遅れないか心配しながら歩いていると、毎日機具を持って集合する場所に到着したので待っていた。そこは家畜場で、柵の前にちょっとした広場がある。家畜場の建物は大きく、長々と二列に並んでいる。土地改革のころは各家に1.5～2頭の家畜しかいなかったが、そこに4～5頭が配分された家もあった。公社が始まったときは、家畜場は満員で、小さい家畜は他の場所にあずけられた。満員のあまり、なかには踏みつぶされた家畜もいた。ところがいまは、どうしたことか、生産隊全体で雄雌60頭いたはずの家畜が、いまや雄雌11頭となり、鳴き声すら聞こえてこない。以前なら、遠い所からでも「グシャ、グシャ」という鳴き声が聞こえたのに……。考えているうちに、いつの間にか眠ってしまった。突然、ホイッスルが鳴り、恐ろしい隊長の怒声で目が覚めた。ぱっちり目をあけて見ると、幸い、まだ誰も来ていない。みんな集合して仕事をはじめているのかと思ったが、隊長が私を怒鳴りに来たのだった。東の空は一面に赤くなり、早起きの鳥たちがそれぞれに飛びながら鳴いている。空はまだ完全には明るくなっていない。ホイッスルと隊長の怒声のなかで、また頭がぼうっとして眠ってしまった……。次に目が覚めたときには、全身に冷や汗をかいていた。いつ来たのか、となりの岩の上で居眠りしていた細毛（私の隣家の子）が、昏睡して、わきに置いてあったミノに倒れ込み、「ガサッ」という音を発したからだ。彼は11才の少年で、小猿みたいに顔が痩せていた。見ると、ミノからゆっくりと苦しう

に頭をもたげていた。空はすでにすっかり明るくなっていて、ミノに引っかかって額から血が流れているのが見えた。どういうわけか、彼は泣いたりせず、叫び声すらあげなかった。みんな本当に、いまでは涙を流す者もない。最も心を痛める事態に出会ってもそうだ。私の父が臨終のときは、壁の毛主席の絵を呆然とながめ、そして母と私にちょっと目を向けたが、私と母は涙の一滴も落ちなかった。ただ、母は私にその絵をひきはがさせた（飢えのため自分ではベッドから降りられなかったから）。さて、細毛が頭から流れる血を拭くのを手伝ってやり、手ぬぐい（汗ふきのこと、記者注）を広げて巻いてやった。それで周囲を見回すと、十数人の男女がいたが（多くは私と同じくらい若い若者だ）、みんな無秩序に、土の上や草の上あるいは岩の上に倒れて眠っていた。しかも趙隊長も粉挽き用の石の上にすわって居眠りしていた（彼も眠いのだ！）。細毛がもんどり打って倒れたものだから、その何人かが目を覚まし、眠気まなこをこすりながらこちらを見ていた。

趙隊長も突然起き出した。すぐに立ち上がってホイッスルを吹くと、眠りこけていた人たちが驚いて飛び上がり、見る間にブルブルと震えだした。「おまえら怠け者の死に豚め（煮え湯に入れられても感じないの意、訳注）。どうしてまだ集合していないんだ」。ぐるりを見回して言った、「よし、今晚、公社に駐在の幹部におまえらの決着をつけさせてやる」。たちまち仕事を分配した。5人は牛糞を西村まで運ぶ。14人は土手のいつもの場所を耕す。私は糞運びにまわされた（もともとうちの生産隊は75人が全労働力だ）。

趙隊長は仕事の配分を終えると、グチをたれながら憎々しげに歩いて行った。彼にはやるべきもっと重要な仕事がある（眠ることだ）。私は天秤棒でもっこを担ごうとしてみたが、1度目は担げなかった。思わずもっこを眺めてしまった。いったいどれくらいの重さがあるのだろう。冷静に勘定してみた（もちろん誇大気味になるだろう）。土まみれの牛糞がもっこ前後で最大25キロだろう。それにしても何と重いことか。私は今年26才で、今まで病気のしい病気をしたことがない。以前は300斤（150キロ）を持ち上げられたし、普段、その半

分くらいなら何ともなかった。今回は50斤(25キロ)が1万斤もあるかのようだ。どうしたのか！ほかの人たちを見てみると、私よりひどい。私はもう一度力を入れてみたら、とうとう担ぎ上げられた。牛糞を東から西に運ぶと村を横切ることになる。村のなかまで担いできたら、ある家の門前で3人がかたまって何かを見ていた。私も疲れたので、もっこを降ろしてちょっとのぞいてみた。1人の餓死者だった。かたわらの者が言った、「呉おぼさんの弟よ。メシのことで姉さんの手伝いに来ていたんだけど、いまや人助けどころかわが身が危うくなったというやつよ。呉おぼさんは半月で床から出られなくなり、家族は夭折し、この弟さんは昨晚、姉がドアをあけに床を出ることすらできないので、もうダメだ、出て行こうと思って、この出口のドブを渡ろうとしても渡れなかった。かわいそうに、このドブを渡ろうとして倒れたきり起き上がらなかったんだ。呉おぼさんは、弟が外でドブに落ちた音を聞いてもダメだ。かわいそうに」。話したのは女で、彼女は泣いていた。どうして泣くのか？私なら泣かない。私は父が死んでも泣かなかったし、わが子が死んでも泣かなかった。ああ、人はどのみち死ぬものだ。

同僚たちは糞を地面にこぼすと、野草や草の根を探し始めた。正直言って、腹がみじめなほどへって、泥土や牛糞を口に放り込めないのが忌々しかった。ブタクサを何本か掘り出せたので、それ以上無いくらい素早く呑み込んで腹のなかへ入れた。泥や糞尿がついていてもかまわない。ほかに腐ったイモをみつけた。去年の残りだ。こんな残りがもう1個でもあればよかったのに。

探しあぐねたので、同僚たちを見ると、すでに3人が得るところなく飽きて眠っていた。私も地べたにころがって眠った。寝込んで朦朧となったとき、張さんの五男が私を起こして言った、「もう時間だよ。戻らないと。目が血走っているあいつが来たら面倒だ」。そこですぐに戻って行った。たしかに、包姓庄の入口で、眠って目が赤くなった趙隊長と出会った。「なん往復した？一人ずつ任務が完了したか見ているぞ」。張さんの五男は答えた、「十数往復して、1万斤(5千キロ)を超えました」。いまでは私たちも「理論(うそ)で實際を指導する」を学んだ。50

斤100斤を1万斤と称するわけである。党が提示する「1日は20年に等しい」というスローガンにもとづけば、いかなるものもすべて7000倍とするべきで、そうしなければ、後進的な保守分子であり、「むち打ち(弁論)」をくらうことになる。党のスローガンに応じないわけにはいくまい！

私はここで食堂に食べに行った。朝食で食べたのは黒麩メン1人6両(300グラム)、しゃもじ2杯の野菜スープだ。正直言って、これらは以前なら家畜ですら食べなかった、うちは土地改革のとき貧農だったのに！ところがいまでは、見ただけで目が血走り、よそってくれる人が少しでも多くよそってくれないかと恨めしい。食べる前は一口で呑み込んでしまいたいと思うのだが、口元に持ってくると惜しくなり、一気に食べてしまうのがもったいない。それでゆっくりと咀嚼した。ああ、あの黒麩メンのうまいことと言ったら、これからは絶対に家畜に食わせたりはしない、なんともったいないことか！食べ終わると、母親と妻の分をよそってもらった。2人にはこうしてふたつに分けてよそり、それぞれに食べるのだが、2人で喧嘩になる。母親は、私が妻をひいきしていると怒り、妻には多め濃いめにしてやるとか、私が盗っているとか言うのだ。ところが妻の方も、同じように言って私に怒る。本当に困ったものだ。実は私は、一度だって片方のことをひいきしたりしたことはない。食堂でよそられた通り、そのまま持って帰っていた。どうしろと言うのだ。国は「面倒を見てくれる」だけで、ほかにご飯を作ったり、人員管理をしたりしている人は、もっと食べたいだろう。でなければ、彼らはどの人も顔色がつやつやしているではないか。見てほしい、あの厨房の東側の小屋では、7、8人の幹部がテーブルを囲んで、談笑しながら食べているではないか。お椀には、白いうどんばかりか、肉すら載っている。くそっ！公社ではこのところ家畜すら毎日のように餓死している。かわいそうに、家畜たちはみんな彼ら幹部の腹の中に供され、われわれはそのにおいすら嗅げない。しかし、話を戻せば、あいつらがいいものを食べていても、私はまったく不満には思わない。あいつらはいくらか字が読めて、人を怒りつけ、大幹部に笑いかけることが出来る。大した腕前だよ。われわれ農民にく

らべられっこない。たぶんあいつらの先祖が陰徳を積んだんだ（先祖がかげで積んだ功德が子孫に幸運をもたらすという民間信仰—訳注）。われわれはこれしか食べられないとしても、こんなにたくさん食べているじゃないか。あいつらは私に怒りつけ、本当に困り者だ。しかし、心配ない、ちゃんと立っていれば影も傾かないというものだ。

家に着くと、出勤のサイレンが鳴った。朝のと同じだが、みんなはサイレンが鳴って2時間くらいしてから行く。おかしな話だが、弁論会はほぼ毎晩開かれ、大部分の人は「むち打ち」のひどさを経験しているのに、サイレンを恐れなくなっている。正直言って、私ですら気持ちがだらけている。1957年以前には、サイレンが少しでも鳴ると、みんな集合したものだ。10時に出勤なのに、いまや太陽が西に傾いてもまだ集合していない。たぶんみんなが恐れなくなったのも、原因がないわけではない。弁論会は以前と同じように何回も開かれるが、殴る役目の人は以前より少なくなっているか、以前ほど力が入らなくなっている。58年のころは、糧食は時期により不定量で、みんな力があつたから、一発殴っても蹴ってもすごかった。いまはそれほどきつくない。もうひとつは、人を殴るのがイヤになってきた。みんなこう思っている、「今日、人を殴っても、明日は自分がやられるかもしれない。つまりは自分で自分を殴ることじゃないか。ばからしい」。この話はよろしくないが、若干の道理がある。ほかに、われわれ農民のなかに、いまでも人を殴る力のあるやつは本当に少なくなっている。今日明日にも「冥土行き」になるかもしれないのに、冥土へ行く前に恨みをかけてどうする、と思っているんだ。

昼の出勤では何ごともおこらなかつたが、趙隊長は太平楽がいつも嫌いだ。張さんの五男を見かけると、すぐに怒りつけた、「このガキ、おまえは明らかに30斤（15キロ）のもっこしか担いでいないのに、十何回も担いで何千キロだとか、よくもデタラメをこいたな。ご先祖様（党のこと、訳注）を騙せるとはいいい度胸だ。よし、今晚、目にももの見せてやる」。張隊長はわれわれをデタラメと言うが、これは変だろう。去年おまえが15ムーのまもなく熟れるトウモロコシを根っこから掘り出して、1ムーの土地に植

え付け、トウモロコシの1ムーあたりの生産量は205斤と報告したとき、誰かおまえはデタラメだと言ったか？モミの1ムーあたりの生産量は2万斤と報告したとき、誰もデタラメだと言わなかったのに、どうしてわれわれはデタラメなのか？党的な精神に準じて、党の呼びかけに積極的に応じるのがデタラメだとすれば、党の話がデタラメであるか、党の呼びかけがデタラメなのだ。それはとんでもないことだし、おまえは寝ぼけているか、食べてぼけたのだろうか。

このように話したが、彼から一喝されて、午後はずっと胸がドキドキしていた。みんなも同様で、以前の通りならお昼に1回だけ運ぶが、今回は2回運んで、2千斤になった。張さんの五男は2回ともことさら多く担いで、フラフラしながら運び、何度も路上にひっくりかえりそうだった。「血まなこ」隊長が、目を血走らせながら、彼をじっと見ていたからだ。張さんの五男は本当にかわいそうだ。父母と弟が二月のあいだに亡くなり、いまは彼と妹たちだけが残されている。本来はかわいくて聡明な子どもだったはずだ。

私に生産力について語れって？だめだ、私は生産力が何なのかわからないのに、どうやって計算しろって言うんだ。おおかた、こういう具合だろうさ。同じ遠さの道で、以前自分は毎日30往復できたが、いまは3往復しかできない。以前は1往復につき少なくとも150斤（75キロ）運べたが、いまは1往復で多くて50斤（25キロ）しか運べない。合計して計算すれば、以前は1日でしたことを、いまはひと月でやる。どうしてこうなっているのかって？それは私には言えないよ。ただ、そのころ私は毎日3斤は食べていたし、油も肉も野菜もあった。

感想はどうかって？どうして立ち上がって共産党に反対しないのか？ああ、同志よ、そんな問いは私に罪をなすりつけることになる。共産党に対しては、とても熱愛しているんだ。感想はまったくない。それに、共産党への反対を誰がひっぱるのか？どんな反対方法があるのか？共産党はすごく頭がいいぞ……

よし、会議によばれている。これ以上はつきあえない。張さんの五男のことをいつも考えているよ、自分が彼から「弁論」をくろうかもしれないと。ただ、今晚の会議は野戦の準備らしい。そのはずだ、

トウモロコシは植えなければ熟さないからな。

1960年4月19日3時

【記者付記】本文の中国語原文は、『星火』第2期(1960年)に登載される予定だったが、印刷されるまえにメンバー全員が逮捕されたため、発表されなかった。その後、50年を経た2010年2月に譚蟬雪編著『求索—兰州大学《右派反革命集团案》纪实』(香港天馬出版社)ではじめて印刷発表された。現在は、『求索』の増補版がニューヨークの国史出版社から『星火: 兰州大学“右派反革命集团案”纪实』という書名で電子出版され、それがグーグル・ブックスで全文見られる状態になっている。ただし、中国国内では、上記の香港の本は流通販売できず、グーグルも閲覧することができないので、原文を閲読した人は非常に少ないと思われる。

本文は、口述のかたちをとっているが、どこまでが現実の口述にもとづくのか、それとも完全に創作なのか、よくわからない。文中に注として「記者」がインタビューしたかのような書き方があるが、もし向承鑑が聞き役でインタビューしたとすれば、最後の段落で共産党に反対する行為について質問したことになる。そのような会話が1960年の農村にありえたのか、興味深いところである。また、本文の語

り手は、大飢饉の現実を客観的に語るだけでなく、その現実自身が馴されていることも語る。彼が公社の幹部の不公平に対して不満に感じないと話す場面で、「ちゃんと立っていれば影も傾かない」(原文では、「俗话说: 人正不怕影子歪」)ということわざを引くが、おそらく現場の農民が口にしていて、彼ら農民の論理を示すことわざなのであろう。言われた通り正しくしていれば、非難されるスキができないという、一見正しい生き方の論理が、自分の服従の正当化、自分で自分に言い聞かせる論理に転用されていたのであろう。最後の「野戦」は、収穫を多くみせるために、トウモロコシの植え替えをする話につながっており、農民たちは食べるものすら無いのに、トウモロコシの熟れるのを準備するという、強烈な皮肉で擱筆しているのである。

この作品が、大飢饉の同時代に書かれたことに注意してほしい。現実を記録しているのみならず、ウイットに富んでいて読者をひきつける力を持つことに驚嘆させられる。小品ながらも、ソルジェニツインの『イワン・デニソビッチの一日』(1963年)と同様な構想と叙述方法であり、生存の極限世界を目にしたふたりの作家が、その極限を読者に伝える最善の方法として、同様な構想に至ったことにも驚嘆させられないだろうか。(土屋昌明)

[(2) ページからのつづき]

と私との話で語っていた。周知のように、方励之は六四の重要人物である。林昭とともに右派とされ、彼女と結婚しようとした甘粹のことが、胡傑監督『林昭の魂を探して』に登場するが、彼は『北大魂—林昭与「六・四」』(台北秀威資訊公司出版、2010年1月)を出版している。本書は1989年4月15日から6月4日までを日記形式で叙述しており、林昭関わった1957年の北京大学の「民主化運動」と1989年のあいだを行ったり来たりしながら、中国の政治社会を議論している。おそらく1989年当時、少なくとも北京大学の学生たちとその周辺には、57年の『広場』を中心とする学生運動を参照する動向が存在したのだろう。

こうなると、現在でも中国政府当局が57年の右派に対して慎重な態度をとっていることが想起される。

2017年度の活動で、私は雲南省東風農場で働かされたもと右派を招こうと考えたが、ビザの取得以前に、パスポートの取得ができないらしいと聞いた。張先痴の話でも、もと右派の老人たちが60周年を記念する行事をおこなうのが困難だったとのことである。彼らは80年代までに名誉回復されたはずなのに、なぜ今でも差別をうけるのか? 張先痴の話で、「右二代」という言葉を知った。右派の二代目(右派の子ども)という意味だ。右派の出身論が生きているわけである。こうしたもと右派への態度は、もちろん中国社会の根深い差別意識をあらわしているが、その背後に50年代末から連続する、右派への政治的な強い忌避感があるのではなからうか。逆に言えば、もと右派を差別する人々も、深層心理的にそのような連続性を感じとっているのかもしれない。

(つちや・まさあき、本会幹事、専修大学教授)

胡傑監督『林昭の魂を探して』字幕（その 6）

土屋昌明 編訳

[前号からのつづき]

099

陈爱文：秋天，林昭来找我，我知道她保外就医。开头我问她：你干嘛去搞这些东西，我知道她搞个地下刊物被抓起来。我责怪她：你干嘛要搞这些东西，她那几句原话我现在记得住的。她说：我认为我们应该这样生活下去，这种生活必须要改变。我呢说：不对！我那时候很相信毛主席的噢，也相信共产党。我说：共产党肯定要在全世界胜利。我还不是抽象的说共产主义的，就具体的中国共产党、苏联共产党，这些共产党要在全世界胜利的，人类要生活在共产主义这个时代里面的。当然这几年是犯了错误的，三年。我跟她这样讲。这样讲吗，林昭觉得跟你没啥讲头。没什么话好讲，变成没有共同语言了。

陳愛文：秋に林昭が会いに来た。保釈治療中だと聞いていた。すぐに彼女に聞いた、「なぜそんなことをしたんだ？」。地下出版物をやって捕まると知っていたから、「なぜそんなことをした」と問い詰めたんだ。もとの言い方は忘れてしまったが、「今の生活ではだめだ、生活を変えなければ」と彼女は言った。私は「違う」と答えた。当時、私は毛主席と党を信じていたんだ。「共産党は必ず全世界で勝利するよ」と答えた。抽象的な共産主義ではなくて、具体的な中国共産党・ソ連共産党といった共産党が全世界で勝利し、人類は共産主義の時代に入るといふことだ。この3年程度の間違ひはあったとしてもだ。私はそう話した。すると、林昭は話にならないと思ったのだろう、話し合うことはなくなってしまった。

100



解説：有一次，她去看望了新闻专科学校时期的班主任胡子衡先生。

解説：林昭がある日会いに行ったのは、専門学校時代の担任の胡子衡氏。

胡子衡，原上海解放日报总经理。

胡子衡：もと上海解放日報社社長。

胡子衡：她指着我的鼻子，意思是说我很想听你的话。你教会我很多道理，革命道理。但是你没教我怎么做人，你这点没教我。她那做人是打引号的。就是那些坏东西。但我不和她辩论，我说不要这样吵了，她拍桌子打板凳，边上我怕别人听见，那个时候是个什么时候，我把门关起来，我一个人在办公室，外面人还走来走去的呢，我说：外面听见了，你不要这么吵，吵干什么。你给我讲有什么用啊，他说不行，她是倾盆大雨连骂带说。其中她讲了一个故事我现在记不得了，那故事纯粹是讽刺我，就是你们这些人愚昧无知到现在还觉醒。

胡子衡：彼女は私を指さした、話を聞きたいというのだ。あなたから革命の道理は教わったが、どのように「人」になるかは、教わらなかったと。彼女の言う「人」は括弧付き、つまり悪人のことだ。私は言い返さなかった。「そんなけんか腰になるな」と私が言うと、机をバンとたたいた。外に聞こえないかと心配だった、ああいう時代だから。ドアをしめてきて、事務室には自分だけだったが、ドアの外には行き来があった。「外に聞こえるから、そんなけんか腰はやめろ、けんか腰になってどうする。私に言っても意味ない」と私が言っても、彼女は聞かない。ものすごい勢いで怒った。話の細部は忘れたが、私を完全に皮肉の話だった。つまり、あなた方は愚昧のあまりいまだに目が覚めないのかと。

101

解説：（林昭手稿）在狱中林昭给人民日报的信中写

道，“长期以来，当然是为了更有利于维护你们的极权统治与愚民政策，也是出于严重的封建唯心思想和盲目的偶像崇拜双重影响下的深刻奴性，你们把毛泽东当作披着洋袍的”真命天子” 竭尽全力在党内外将他加以神化，运用了一切美好辞藻的总汇和正确概念的集合，把他装扮成独一无二的偶像，扶植人们对他的个人迷信

解説：（林昭の手稿）獄中で人民日報社にあてた手紙にこうある、「長い間、あなた方の全体主義統治と愚民政策を維持するのに有利であるよう、また重篤な封建的唯心思想と盲目的偶像崇拜の二重の深い影響による奴隷根性で、あなた方は毛沢東を、洋服を着た「真の天子」として、全身の努力をつくして党内外での神格化に努め、美しい言葉をかきあつめ、正しい概念をまとめあげて、唯一無二の偶像に仕立て、人々に彼への個人崇拜を植え付けた」。

标语：坦白从宽。

標語：自白すれば寛大に扱う。

102

胡子衡：她那些话不是一句两句，然后给你扣一个右派帽子，她是有系统、有理论的。对那些东西，这正是我们要改革的，不是今天，就是说不是一下子能够完成的。她讲的那些现在看是没有错的，她看到的一些问题、当时那些现象，这些现象正是我们今天要做的事情。不可能在五十年前，不可能的。

胡子衡：彼女は一言二言で右派にさせられたのではない。系統的で理論を備えていた。それらこそ改革に必要なことだ。今日でなくても、すぐにはできないから。彼女が話したことは、今からみれば間違っていなかった。彼女がみていた問題は、当時の諸事象は、いまこそやらなければならないことだ、50年前では無理だったが。

上课1949苏南新闻专科学校的课堂

1949年、専門学校時代。

胡子衡：但是她那些话在当时都是犯忌的。如果我对她要同情或者一样谈的话，我就会戴反革命帽子。在

当时的政治条件下，她那一句话每一句话我要同情或站在一起说话了，我就可以评成反革命。

胡子衡：とはいえ、彼女の話はすべてタブーを犯していた。私が同情したり同調して話したりしようものなら、私が反革命のレッテルをはられていた。当時の政治状況では、彼女の一言二言に、同情したり立ち話したりしただけで、反革命と批判されても仕方ない。

林昭1949年在苏南新闻专科学校。

1949年、専門学校時代。

103

林昭文章1949年《我们相亲相爱就象兄弟姐妹。》

1949年の林昭の文章「私たちは兄弟のように仲良し」

解説：林昭在獄中写道：诚然我们不惜牺牲，甚至不避流血，可是象这样一种自由的生活，到底能不能以血洗的办法使它在血泊之中建立起来呢？中国人的血历来不是流得太少而是太多，即使在中国这么一片深厚的中世纪遗址之上，政治斗争是不是也有可能以较为文明的形式去进行，而不必诉诸流血呢！

解説：林昭は獄中でこう書いている、「本当は私たちは犠牲を惜しまない、血を流すこともいとわない。しかし自由な生活は、血で血を洗うような方法で、血と涙の中に立ち上げられるものなのか？中国人が今まで流してきた血が少なかったから（自由が立ち上げられていないのではなく）むしろ多すぎた。たとえこんな中国という、厚い中世の土に残る遺跡の上でも、政治闘争は、より文明的な私たちで進めることが可能であって、必ずしも血を流す手段に訴えなくてもよいのではないか！」

104

解説：林昭和黃政共同起草了一份中国改革方案，提出了八項主張，然而他们的活动早有人监视，林昭再次入獄后，黃政也随后被捕并判刑十五年。

解説：林昭と黃政は共同して中国改革案を起草、8項目の主張を出した。だが彼らの活動はとうに監視

されていた。林昭は再び入獄、黄政も続いて逮捕されて懲役15年となった。

105

上海寧波路

陈伟斯——原《民主与法制》记者。84岁。
陳偉斯、もと『民主と法制』記者、84歳。

解说：在我采访的过程中，陈伟斯先生是唯一看过林昭档案，而又接受我们采访的人。1981年他写了《林昭之死》的文章，刊登在《民主与法制》的杂志上。然而事后不久，林昭的档案资料被全部封存。

解说：取材をした中で、陳偉斯氏は林昭の檔案を見たことがある人として、取材を受け入れてくれた唯一の人だ。1981年「林昭の死」という文章を書き、『民主と法制』という雑誌に掲載した。その後すぐに、林昭の檔案資料はすべて閲覧不可となった。

问：你写这篇文章的时候，是参考了哪些资料写出来的。

答：我到静安区公安分局去看了林昭的档案，当时（粉碎四人帮）虽然是民主的开端可以看到了，但是呢还是小心翼翼，有很多重要的材料不敢写上去。

问：当时的档案你都看到了吗？

答：都看到了。都看到了以后我总感觉，这篇文章就象钻空子一样钻出去，钻出去再讲，所以保留了不少东西（没写），到现在非常可惜。

胡傑：この文を書いたとき、どんな資料を参考にしたのですか？

陳偉斯：上海市静安区公安分局に行って林昭の檔案を見た。四人組打倒の当時、民主的になりかけていたが、それでもまだビクビクしながらだった。だから写せなかった重要資料がたくさんある。

胡：当時の檔案を全部見られたのですか？

陳：全部見られた。全部見たあと考えるに、この文章は隙を突いて出し、隙を突いて様子を見ようとした。それで、かなりの部分を残して書き写さなかったのは、今でも非常に後悔している。



106

解说：林昭在狱中写道：光是镣铐一事，人们就不知玩出了多少花样来，一副反铐，两副反铐，时而平行，时而交叉。最最惨无人道酷无人理的是，无论在我绝食中，在我胃炎发病疼得死去活来时，乃至在妇女生理特殊的情况下——月经期间，不仅从来未为我解除过镣铐，甚至从来没有减轻，比如两副镣铐中暂时除掉一副。

解说：林昭は獄中でこう書いている、「手枷足枷についてだけでも、彼らはどれだけ悪智慧を働かせることか。1ヶ所だったり2ヶ所だったり、並行させたり交差させたり。最も非人間的なのは、絶食中でも、胃痛で七転八倒していても、女性の生理の特殊な状況すなわち月経の間ですら、手枷足枷を解いてくれることはなく、枷の両側のうち片方をはずしたりして軽くしたことすらない」。

107

问：档案里有血书吗？

答：有血书，血写的。

问：写在什么上头的？

答：写在一张黄的纸上。所以说仔细看起来就不大好看，

问：认不出来了？

答：认得出来，看还是可看的。经过这么多年，颜色退了一点。

问：有没有写在其他地方的，比如说写在布上、衣服上的，那些血书。

答：衣服上的没看到。

问：她档案中都有哪些方面的内容？

答：审讯的笔录什么东西都有。

问：听说那些笔录，林昭的回答是十分精彩的是吗？

答：对！我只看半天，你想不可能很细致地看。最主要的一点是我们对当时民主的判断有信心但是也不放心，也感觉到这是一次很危险的采访。

胡：身上書に血書はありましたか？

陳：あった。血で書いたものだ。

胡：何に書いてあったのですか？

陳：黄色い紙に書いてあった。だからよく見ないと読めない。

胡：読み取れましたか？

陳：なんとか読めた。何年もたって色は多少あせていた。

胡：他の物に書いたのは？その血書を布とか衣服とかに。

陳：衣服に書いたのは見なかった。

胡：檔案はどんな内容ですか？

陳：審査のメモその他いろいろだ

胡：そうしたメモにある林昭の応答は素晴しかったという話ですが。

陳：そうだ。でも私は短時間だったので、じっくり読めなかったんだよ。最もわかってほしいのは、当時の民主的な判断を信じてはいたが、やはり慎重さが必要だったことだ。この調査は非常に危険だった。

108



解説：林昭在獄中曾用血书这样写道：这怎么不是血呢？阴险地利用我们的天真、幼稚、正直。利用着我们善良、单纯的心，与热烈、激昂的气质，欲以煽动加以驱使，而当我们比较成长了一些，开始警觉到现实的荒谬和残酷，开始要求我们应有的民主权利时，就遭到空前未有的惨毒无己的迫害、折磨和镇压。怎么不是血呢？我们的青春、爱情、友谊、学业、事业、抱负、理想、幸福、自由，我们之生活的一切，这人的一切几乎被摧残殆尽地葬送在这污秽、罪恶、极权制度的恐怖统治之下，这怎么不是血呢？

解説：林昭は血でこう書いている、「これが血でないはずがろうか？私たちの天真さ・幼稚さ・真剣さを裏で利用し、私たちの善良で単純な心と情熱的で高揚した気分を利用して、煽動して駆り立てておきながら、私たちが少し成長して、現実のでたらめさ残酷さに気づき始め、あるべき民主的権利を要求し始めると、空前絶後の残酷きわまりない迫害と打撃と鎮圧に遭わせた。これが血でないはずがろうか？私たちの青春・愛・友情・学問・仕事・抱负・理想・幸福・自由、私たちの生活の全て、人としての全てをめった打ちにして、汚濁と罪悪と全体主義

の恐怖政治の底に葬り去った。これが血でないはずがろうか？」

109



林昭獄中手稿 原件是血书，后经林昭用钢笔誊抄。

林昭の獄中手記、もとは血書、本人がペンで書き写したものの。

解説：在我们的面前摆放着的是林昭给人民日报的一封信以及其它的文章共十四万字，其中很多部分是经林昭誊抄的血书，这是一位警官冒着生命危险把它拿出来的。至今我们不知道他是谁，叫什么名字。

解説：私たちの目の前に並んでいるのは、林昭の「人民日報に送る手紙」とその他の文章合わせて14万字、その大部分は林昭が書き写した血書、ある警官が生命を賭して持ち出したものだ。いまだにそれが誰かはわかっていない。

“起诉书” 跋语（血书）。

「訴状」 跋語（血書）。

自由万岁。

自由萬歲。

解説：就我们目前所知，剥夺了笔和纸的林昭在狱中用自己的鲜血和发夹，书写了20余万字的诗歌、文稿的血书，这在人类思想史上，乃至人类历史上都是绝无仅有的。

解説：今わかっている範囲では、ペンと紙を奪われた林昭は、みずからの鮮血とヘアピンで、20万字の文章と詩歌の血書を書いた。これは人類の思想史で、ないし人類の歴史においても空前絶後のことだ。

110

解説：林昭曾在狱中的墙壁上血书写道：“不、不！上帝不会让我疯的，在生一日，她必需保存我的理智，与同保存我的记忆！但在如此固执而更加阴险的无休止的纠缠与逼迫之下，我几乎真地要疯了！上

帝，上帝帮助我吧！我要被逼疯了！可是我不能够疯，也不愿意疯呀！……

解説：林昭は獄中の壁に血でこう書いた、「いや、神は私を発狂させはしない。日々私の理知を保ち、記憶を保持させてくれる。だが、かくも執拗かつ陰険さを増して、止めどなく絡みつき強迫してくるのでは、ほとんど本当に狂ってしまいそう。神よ、私を助けたまえ！発狂させられそうです！しかし狂うわけにはいかないし、狂いたくもありません！」

111

晨练的老太太唱的歌词：那高鼻梁、那双眼皮、那单薄不厚的红嘴唇。……

朝トレでおばあさんたちの謡う歌：あの高い鼻、あの二重まぶた、あの可愛い赤い唇……

解説：林昭在狱中的情况监狱的工作人员没有人愿意接受我们的采访。

解説：林昭の獄中の状況について、監獄の職員は誰も取材を受け入れようとしなかった。



112

许觉民：至于害死林昭的这批人现在还在，还盘踞高位，听说还盘踞高位，但是我不知道是谁，我听说上海有还盘踞高位。

許覚民：林昭を殺害した者たちは今も生きており、高い地位にいる。そういう話だ。誰なのかはわからないが、上海で今でも高い地位にいるらしい。

113

洗衣机，我要双缸的上下水啊，电冰箱最好是三开门，彩色的电视带摇控。

洗濯機、私は2層式がほしい。冷蔵庫、3つドアが一番。カラーテレビはリモコンつき。

114

解説：我在采访中见到了一封林昭在狱中写给她妈妈信的残片，写作的时间

详，信中写到：“你弄些东西斋斋我，我要吃呀，妈妈！给我炖一锅牛肉，煨一锅羊肉，煮一只卤猪头，再熬一二瓶猪油，烧一副蹄子，炸一只鸡或鸭子，没钱你去借。月饼、年糕、馄饨、水饺、春卷、锅贴”林昭一口气写下了五十六种要吃的食品，在信的结尾她写到：“写完了，自己看看一笑！”她随即题诗一首：“尘世几逢开口笑，山花须插满头归。举世皆从忙里老，谁人肯向死前休！”致以女儿的爱意，我的妈妈。

解説：取材中、彼女が母親にあてた手紙の一部を見た。いつのものかは不明、「母さん、何か作って差し入れして、食べたいです。牛とか羊の煮込み、豚のほお肉のあんかけとラードを少し、豚のもも焼き、鴨か鳥の丸焼き、お金はどこかで借りてきて。月餅・お餅・ワンタン・水餃子・春巻・焼餃子……」林昭は食べたいものを一気に56種類も書き、最後にこう書いている、「書き終えて一人笑った」。そして詩を一首添えている、「塵世に幾たび逢うや開口の笑、山花は満頭に挿して帰るべし。世を挙げて盲老に従う、誰か敢て死の前にやまん。恋しい母さんへ」。

115

1964年4月12日

解説：林昭在狱中写了一首悼念舅舅许金元的诗。四月十二日 ----- 沉埋在灰尘中的日期，三十七年前的血谁

记忆，死者已矣，后人作家祭。但此一腔血泪，舅舅啊 甥女在红色的牢狱中哭您。我知道你，在国际歌的旋律里，教我的是妈，教妈的是您。假如您知道您为之牺牲的亿万同胞而今却只是不自由的罪人和饥饿的奴隶！

解説：林昭が獄中で書いた、おじの許金元を追悼した詩。「4月12日……塵埃に埋もれた日、37年前の血を誰が記憶しているか。死者はもういない、子孫が祭るのみ。体にたぎる血と涙で、おじさま、あなたの姪は赤い牢獄で涙します。私は知っている、インターナショナルを私に教えたのは母、母に教えた

のはあなた。あなたが知ったとしたら……あなたが彼らのために死んだ、その億万の同胞たちは、今や不自由な罪人と飢えた奴隷でしかないと」。

许金元、林昭的舅舅，中共一九二七年江苏省青年部长，被蒋介石杀害于南京。

許金元、林昭のおじ、中共1927年江蘇省青年部長、南京で蒋介石に殺害。

116



解説：1964年12月在狱中关押了近四年的林昭接到了上海市静安区人民检察院的起诉书，按林昭的原话说：“夫自有政治起诉以来，未有如此之妙文也。”林昭接过起诉书，对它进行了3739字的评注与批判。起诉书写到：林昭确定了实行私人办厂的经济路线，妄图搜罗各地右派分子，在我国实施资本主义复活。林昭注曰：正确地说是：计划集合昔年中国大陆民主抗暴运动的积极分子，在这古老而深厚的中世纪遗址上掀起强有力的，划时代的文艺复兴——人性解放运动！

解説：1964年12月、獄に捕らわれて4年近くなる林昭は、上海静安区人民検察院の起訴状を受け取った。林昭はこう言っている、「政治起訴文というものの中でも、これほど素晴らしい文はかつてない！」。林昭は起訴状を受け取ると、3789字のコメントと批判を書いた。起訴状にはこうある、「林昭は私設工場という経済路線を实行、各地の右派分子を糾合して、我が国の資本主義復活を狙ったと判断される」。林昭のコメント、「正確には、往年の中国大陆の民主反暴力運動の積極分子を集め、この古くて分厚い中世の遺跡の上に、強力で画期的なルネッサンスすなわち人間性の解放運動をもたらそうと計画したのだ」。

117

林昭獄中血書——血衣題跋。

林昭の獄中書——血で服に書いた題跋。

解説：1965年5月31日上海市静安区法院判处林昭徒刑20年，林昭接到判决书后刺破手指，在判决书的背面写下了判决后的声明：昨天，你们，那所谓的伪法院，假借和盗用法律的名义非法判处我徒刑20年，这是一个极其肮脏、极其可耻的判决。但它确实也够使我引为叛逆者无尚光荣的，它证明着作为一名自由战士的林昭，吾至清操大节正气。

解説：1965年5月31日、上海市静安区裁判所は強制労働20年の判決を下した。林昭は判決書を受け取るや、手の指を切り、判決書の裏に判決後の声明を記した。「昨日あなた方にせ裁判所は、法律の名を語って、法に反して私に懲役20年の判決を下した。極めて不潔で恥ずべき判決だ。しかし、確かに叛逆者としての栄光を私にもたらすに十分だ。自由の戦士としての林昭、私が節操と正気を貫いたことを証明している」。

118



浙江 湖州

浙江 湖州

朱郭—林昭苏南新闻专科学校的同学。

朱郭、林昭の蘇南ジャーナリズム専門学校時代の友人。

朱郭：在沉寂的时候，你喊叫；在疯狂的日子里，你清醒；你流尽最后一滴血为着亲爱的祖国；你在阴霾中死去，必定在晴空下复活。

朱郭：沈黙の中で、あなたはさげんでいた。狂気の日々に、あなたは正気だった。最後の一滴まで血を流した、愛する祖国のために。あなたは闇い霧の中で死んだ、必ずや晴天の下で復活するだろう。

林昭：1950年在苏南新闻专科学校。

林昭の写真、1950年、蘇南新聞専門学校時代。

119



解说：这是50年代林昭在苏南新闻专科学校时期的同学朱郭先生，今天他带着妻子临终时的遗言，去千里之外，看望一个素不相识的人。

解説：これは50年代に蘇南新聞専門学校時代の同級生だった朱郭である。この日、自分の妻が臨終時の遺言を持って、千里の遠く、もともと知り合っていない人を訪ねに来ていた。

山东曲阜师范大学。

山東曲阜師範大学。

朱郭：（我的妻子病重时）她让我一个人来看你，结果呢，她三月二号去逝了（1999年3月2日）所以，我现在不是一个人来看你，我现在是代表两个人来看你的，我也了结了一个心愿，就是说我是代表两个人向你问好了，你讲下去。请你保重。

朱郭：妻の病いが重くなったとき、私1人であなたに会わせようとした。結局、（1999年）3月2日に亡くなってしまった。私もこれで気が晴れた。つまり今日は1人で来たのではなく、2人で挨拶に来たのだ。お体に気をつけて講義を続けて下さい。

张元勋：曲阜师范大学中文系教授 原北大《广场》编辑部主编。

張元勳：曲阜師範大学国文学部教授、もと北京大学《広場》編集部主編。

张元勋：我这个人不大淌眼泪，因为什么呢？过去那生活使得我们非常的硬。

朱郭：对对，我也不淌。

張元勳：私は涙もろいほうではない、なぜかという、過去の生活が私たちを鈍感にしたからだ。

朱郭：そうだ、私も泣かない。



120

北京市中级人民法院、通知：案犯张元勋因反革命一案，判处有期徒刑八年。

北京市中級人民裁判所、通知：張元勳は反革命、懲役8年に処す。

解说：张元勋是接受我们采访并同意我们拍摄的唯一一个在监狱见到林昭的人，这个1957年在北大519运动的点火者，因组织刊物《广场》而被判除徒刑8年，1966年5月刑满释放的张元勋凛然忘死去上海提蓝桥监狱，以未婚夫的名义看望了林昭。

解説：張元勳はわれわれの取材と撮影に同意したただ1人の、監獄で林昭に会ったことのある人だ。彼は1957年北京大学の519運動の火付け役であり、組織して『広場』を発刊し懲役8年になった。1966年5月に刑期満了で釈放された張元勳は、凜然として死をも恐れずに上海提藍橋監獄へ向かい、婚約者という名義で林昭に面会した。

上海提蓝桥监狱。

上海提藍橋監獄。

张元勋：进了一个院子，就有人在等着我，这个人后来我知道是副监狱长姓段。他直接冲我说：张元勋你来了，经过研究了欢迎，希望通过你和林昭的关系，能够感化她，使她幡然悔悟，好好改造。其实他说的话我也想到。我也希望林昭能够策略一些，甚至世故一些，能够保存自己，为这个东西不需要付出后来那么大代价牺牲自己。他说：当然了，张元勋你知道我们监狱的事情，他知道我呆过监狱，（段说：）你知道接见是对你们的照顾，如果你敢于在接见中有任何行为，后果很严重。那好吧，你现在跟我去。段监狱长领着我继续往院子里走，一直走到不能再往里进了，抬头一看一个铁门。里面就是监狱了。脚步声很乱，我以为是林昭来了，不是，进来是武警，十几个人，都带着枪，这是我从来没见过的接见局面。（武警）在前面的椅子坐好，然后又听见脚步声，林昭来了，后面两个武警带枪跟着。多严重，对她是看押的，可以说这是一级看押。（她）上边儿穿一件白色衬衣，那是五月份，很脏，外边儿披着夹的外套，也都很破旧，头发很长。白头发，最明显的是三分之一的白头发。头上顶了一块手绢，手绢上用血写的字

“冤”。另外她手上抱了个旧布包，她一进门，站住了，她看见我，我也看见她了，她嫣然一笑，整个屋子都愣住了。后来他那个队长说：从来没见过她这么笑过。

張元勳：門を入ると私を待っている人がいた。副所長の段という人だとあとで知った。彼は直接私にむかって言った、「張元勳さんいらっしゃい。検討の末、あなたが彼女を悔悟させて、自己改造するよう感化できればと願ってお迎えしました」。じつは自分もそう考えていたんだ。林昭がちょっと思い直し、あるいは少し俗っぽくなって自己保存を考え、のちにあんな大きな代価を支払って自分を犠牲にしないように、と考えていた。彼は言った、「もちろん、監獄のことはわかっているね？」私が入獄していたのを知っているわけだ。「面会はあなた方のことを考えてだとわかっているね。面会中に何かやったりしたら、重大な結果を招くよ。じゃ、一緒に来て」と、段監獄長は私を連れてずっと中へ歩いていった。どんづまりまで行き、見上げると鉄の扉で、その中が監獄だ。足音が乱れていたの、林昭が来たのかと思ったが、ちがった。入って来たのは武装警官、10人くらいで、みな銃をさげている。こんな面会は見たことない。武装警官は目の前の椅子にすわった。するとまた足音が聞こえ、林昭が来た。背後に2人警官がピストルを構えてついており、すごく厳重で、彼女に対して拘留の扱い、1級レベルの拘留だと感じた。5月で彼女は上に白いシャツを着ていたが、ひどく汚く、あわせのコートをはおっていたが、これもぼろぼろだった。髪の毛が伸びていた。白くて、3分の1は白髪なのが目立った。頭にハンカチをかぶり、血で書いた字が「冤」とあった。手に古い布袋を抱えていた。ドアを入ると立ち止まり、私を見た。私も彼女を見た。彼女はニコッと笑った。部屋中が唾然とした。面会後に監獄長が言っていた、「今まで彼女のこういう笑顔は見たことがなかった」と。

121

解説：林昭在一次绝食苏醒后，咬破手指在监狱的墙壁写下了这样的诗句：

林昭は絶食で気を失ってから歯で指を切って、監獄の壁に詩を書いた。

自由颂：生命似嘉树，爱情若丽花；自由昭临处，欣欣迎日华。生命巍然在，爱情永无休；愿殉自由死，终不甘为囚。

自由賛歌：命はのびやかな樹木に似て、愛はうつくしい花のごとし。自由が訪れる所、喜んで太陽を迎える。命はそびえるごとく、愛はとこしえ。自由に殉じて死んだとて、囚人であることに甘んじまい。

122

張：我还买了各种各样的蛋糕，她很高兴。按常规我把提包拿出来，我对干部说：你们检查。毫无疑问都检查。奶粉使钳子把盖，那是原装的盖撬开。撬开用铁钎子都插。蛋糕，每个蛋糕都使铁钎子……。东西检查完了，干部说行了，就一下推给林昭。林昭拿了一块蛋糕说：你吃一块吧我请你。我想我吃干嘛？送来太难了，我不吃。我说你太难得到了，你吃吧，你就等于请我了。后来她拿起蛋糕吃了，咬一口，干。接着她就朝后面的挎枪的说：给我倒杯水！就那么不客气。那人手朝门外一招，外面马上就有一人拿暖瓶进来，也穿警服，拿一个杯子搁到桌上。那女医生给她倒水，她一面喝水一面吃。就那么从容。屋里非常安静。

張元勳：ケーキを買って行ったら彼女は喜んだ。規則で荷物を差し出し、幹部に言った、「どうぞ検査して下さい」。粉ミルクは未開の蓋をこじ開け、千枚通しで突き刺す。カステラも全部突き刺した……。検査しおわると幹部からOKが出たので、すぐに林昭に差し出した。林昭はカステラをひとつ摘まんで言った、「一緒にどう？おごるわ」。一緒に食べる？持ってくるだけで大変なんだから、食べたりしない。「きみには滅多にないんだから、きみが食べなよ、そうすればよくにおごったのと同じだ」。すると彼女はカステラを食べた。一口食べて、口がかわき、背後の銃をさげた警官に言った、「水を持ってきて」。全然遠慮がない。警官は外に手招きし、すぐに外からポットを持ってきた。やはり制服で、テーブルに茶碗を置いた。その女医がお湯を入れ、林昭は飲み

ながら食べる、悠然と。部屋は静まりかえっていた。

123

张：她说送你一样东西（一个礼物）。当时我就很难想象她能送给我什么？她有什么可送给我的，当时她进屋时带了一个破布包。她在布包里翻出一个纸包，我觉得非常好奇，什么东西在里面。一直到这东西拿出来，我没看清是什么东西。到跟前了，我才知道是一个帆船。（意思是）：“长风破浪会有时，且挂云帆济沧海”。这是李白的诗。

張元勳：彼女は私にお返し（プレゼント）があると。言った。そのとき、彼女が私に何を贈ることができると見当もつかなかった。そんな物あるわけがない。そのとき、彼女は部屋に汚い布袋を持ってきていた。布袋から紙包みを出す。一体何が入っているのか、気になった。取り出されるまで、何なのかよく見えなかった。目の前に置かれてやっとそれが帆船だとわかった。その意味は、「強風に浪破るるも必ず時有り、雲帆を掛けて蒼海を渡らん」。李白の詩だ。

124

张：她说我现在趁此机会给你讲：我万一死了，被他们杀了，母亲、妹妹、弟弟都是弱者，你多多地关照他们，他们太可怜了。千万千万。说完以后哭了。

張元勳：彼女は話しておきたいことがある、とこう言った。「私がもし死んだら、殺されたのよ。母と妹と弟は弱い立場なので、どうか面倒をみてやって。本当にかわいそう。必ずお願い！」そう言って泣いた。

125

血衣题跋。

血で衣服に書いた文。

解说：由于林昭在监狱坚决地抗争，也使她遭受到了惨毒的折磨，有一次，林昭被一个女狱警殴打后。林昭写道：我默默地抠着墙上的血点，只有想到那么遥远而又那么切近的慈悲公义的上帝时，我才找到了要

说的话。这个满腹委屈的孤愤的孩子无声地祷告过：天父啊！我不管了，邪心不死的恶鬼这么欺负人！我不管了，我什么都不管他们了。

解説：監獄で徹底的に戦ったために、彼女は悲惨な挫折感も味わった。あるとき、女性獄吏に殴打され、こう書いている。「黙々と壁の血の跡をほじる。思いを遙かなる彼方の、しかも側にいる慈悲深き神に致すときにのみ、わずかに言うべき言葉が見つかる。鬱屈と憤りにまみれたこの子は、声なき声で祈る——天なる父よ、もう嫌です。邪心に満ちた悪鬼どもはかくも人を欺く。私はもう嫌です。この者たちに関わりません」。

126

摩罗 民间学者。

摩羅、民間思想家。



摩罗：比如当时上海被枪毙的王申酉，就是比较典型的一个人，他的马克思主义的理论水平非常高，他能够用马克思主义来批评当时的一些现实情况，来批评毛泽东时代的一些做法。那个人已经很不错了，但林昭不局限于马克思主义的资源，而是找到了西方传统更加深远的资源，找到了基督教资源。这个还不是从文化方面谈资源的问题，林昭一旦有了这样的资源后，我觉得，她心中就跟上帝之爱就连接起来了。

摩羅：当時、上海で銃殺された王申酉は典型的な人物だ。彼のマルクス理論のレベルは非常に高い。マルクス主義によって当時の現実状況を批判し、毛沢東時代のやり方を批判できた。彼だって優れているが、林昭はマルクス主義という思想資源だけでなく、ヨーロッパの伝統のもっと深い思想資源、つまりキリスト教を見いだした。文化的な資源の問題を言っているのではない。この資源を見いだしたからこそ、彼女の心は神の愛と結びついたので私は思う。

林昭诗集——自由之羽。

林昭詩集—自由の翼。

摩罗：林昭呢，从我们现在能读到的很少的文字中可以看出：她在平时的表述和诗歌中喜欢用苦难这个

词，她用上帝的圣爱来看我们的芸芸众生感到我们大地上的苦难很多。所以她就有一种非常深厚和宽广的爱心，甚至是对她批判和反抗的对象，也是带着那种爱心，带着那种悲悯。

摩羅：林昭は、いま目にできるわずかな文からでもわかるが、ふだんの表現や詩歌に苦難という語を多用する。神の聖なる愛からわれわれ衆生を見て、この世の苦難の多さを感じとっている。だから深くて寛大な愛の心が備わる、彼女が批判し反抗する対象にすら、そのような愛の心と憐憫が感じとれる。

127

解説：我开始以自己的鲜血写《告人类》书，它那短短的序言性的第一节，在半天之中一气呵成。相信，凡读着它的人们，都不能不感觉到其中深沉而炽烈的悲痛激情。

解説：「自分の血で『人類に告ぐ手紙』を書きはじめた。その序文めいた第一節は、短い時間に一气呵成だ。それを讀んだ人はきっと、そこに潜んだ深く熾烈な悲しみの激情を感じとってくれるにちがいない」。



128

钱理群——北京大学中文系教授。

錢理群——北京大学中文系教授。

钱理群：林昭她自称为奉着十字架作战的自由志士，奉着十字架作战的自由志士。这一点可能意义更重大，就是她对自由有一个解释，她说：自由是一个完整而不可分割的整体，只要还有人被奴役，生活中就不可能有真实而完满的自由。这是在中国近50年的历史这样明确地对自由的一个建树：她说：除了被奴役者不得自由，即使奴役他人者也同样不得自由。她提出这个问题是非常重要的。她一再反省自己是坚定而幼稚的，她反省自己幼稚的时候，开始意识到这青春激情是可能被利用的危险，所以她由此提出一个命题，她说：当我们深受暴政的奴役，我们不愿作奴隶的同时，我们自身作为反抗者，但我们不能建立新的

形式的奴隶制度。我们反抗奴役、压迫，但我们自身不能建立新的奴隶制度。这一点是非常重大的。因为我们的历史教训正好出在这里。

錢理群：林昭は十字架を背負って戦う自由の志士と自称した。十字架を背負って戦う自由の志士、この点の意義がより重要だ。つまり彼女は自由についてある解釈をしていた。いわく「自由は一つの、分割できない全体であり、どこかに奴隷にされている者があれば、生活において真実かつ完全な自由はありえない」と。中国のこの50年の歴史で、これほど明確な自由に対する考え方があったのだ。いわく、「奴隷が自由を得られないばかりか、たとえ他人に奴隷を強いる者も、同様に自由を得られない」と。この問題の提示は非常に重要だ。自分は頑なで幼稚だと再三反省しているが、幼稚さを反省したときに、この青春の激しい感情は利用される危険があると意識し始めた。それゆえ次のテーゼを出した、つまり「暴政によって奴隷化される時、奴隷になりたくないと同時に、われわれ自身が反抗する者として、新たな奴隷制度をこしらえてはならない。奴隷化と圧迫に反抗するが、みずから新たな奴隷制をこしらえてはならない」。この点は非常に重要だ。なぜなら、これこそ私たちの歴史的教訓の出発点だから。

129

文革场面：誓把无产阶级文化大革命进行到底！

文革のシーン：文革を最後までやりぬくぞ！

解説：在林昭写下这些思想的两年之后，毛泽东在中国发动了“文化大革命”。

林昭がこうした思想を書いた2年後、毛沢東は「文化大革命」を發動した。

文革场面：革命无罪！毛主席万岁！造反有理！

文革のシーン：革命無罪！毛主席万歳！造反有理！

三反分子：彭德怀，张闻天。

三反分子・彭德懷・張聞天。

〔次号につづく〕